



春の息吹

「開く花（命の二重奏）」より

ドナテッラ・ビズツティ

開く花は
影の封をやぶる
影はその封を
埋める

「俳句（京都）」より

ダンテ・マッフィア

桜花
我もなりたし
一輪に

「桜へ（花の二重奏）より」

すみくらまりこ

月は必ず満ち、
花は必ず咲く。
自然は約束を反故にしない。

「桜の祈り（桜の二重奏）」より

中澤 京華

出会いと別れの季節
多くの人々を
見守るように
咲き渡り
散っていく桜

「春のような花どき（道の二重奏）」

シャイプ・エメルラウ

僕らの間にゲームが起きたとき
心がたよりなくなった
春一花々のなかへ そのように
君の唇が微笑みへ 艶めいた

気が滅入る結果は 抵抗ができないことだ

僕にはこんな生徒がいる

「遥かなる人（青の二重奏）」より

司 由衣

悲しい嘘と知っていて
「春にはきっと会いに行くよ」
と あなたは言いました
儂い約束と知っていて
「春が待ち遠しいわ」
と わたしは応えました

「歌（川の二重奏）」より

バム・デヴ・シャルマ

花が咲くやいなや
庭に蜂が飛んでくる
ひとつ またひとつ 囁きながら
空と雲 あまたの歌は
神の妙で 酔い痴れてしまった

「母国（魂の二重奏）」より

アナベル・ヴィラー

もういちど 十月
光あふれて菩提樹と雨の時季（とき）

通りをそぞろ歩くと
—プラタナスの花が散り敷きつめられて—
風のイメージ
帰ってきたのか
小さな春の粒
絶え間なくスキャンダラスな狂気

「桜花の志（魂の二重奏）」より

浜田千秋

幻想に咲いた薄紅は
現を淡く染め
記憶に散り逝く

相対の中
無意味などあるものか
不完全の中
非合理などあるものか

「桜へ（海の二重奏）」より
イグ・ラブリュス

雪間にみえる
月のように傾き
そして消え去りし桜は
死なんと願ふとき
すでに光のうちになく
われもまた同じく
滅びの
跡筋をたどるのだ

「春（宴の二重奏）」より
ヤゴトカ・トモフスカ

きらめき燃え立つ
あなたを見た
月のあかりの下で
寝支度もできていて
あなたに会った
五月の夜だった
誕生星の
ぶらんこの上で施錠されている
ルノワールの名作の出口へ
あなたはしたたる髪をかけた

「紅梅（紅の二重奏）」より
石井 春香

息の底に 身を沈める

やわらかな紅のうえに
紅をかぶせて
みやまの雪のたそがれに
あまやかな香（かざ）が散る

「山の春（水の二重奏）」より

ドナテッラ・ビズツティ

そこかしこに水の流れ
とがった堅いつぼみ
膨らんだ生命。
自然は
冬の完璧さから
春へ導かれて行く。



夏の熱情

「エーゲ海（命の二重奏）」より

上村多恵子

目覚めと共に
熱い波に襲われたい
身近な鼓動に
驚いて
胸を当てると
確かめ合いたい
オレンジ色の屋根が
窓から
微笑んで
火傷しそうに
近づく

「夏（道の二重奏）」より

会津太郎

フクシマには山の斜面にまだ棚田が残っている。地域によって異なるが、5月初め頃から棚田に水が入り、農家の人たちは田植えをする。まだ細い早苗はそよ風に吹かれながら、かすかにゆれている。

初夏の水流れ行く棚田かな

「君との時間（夢の二重奏）」より

加納由将

夏は
駆け足で
君は
影だけを残して
去っていった

「罪業（夏の二重奏）」より

中西 衛

燃えたぎる太陽を
ひがな一日
追いかけて
追いかけて

地上でえんえんと
顔を焼かれ
立ち尽くす
それでもめげずに
小学校の校庭に花咲く向日葵
それが
どうだと言うのだ

「浄化（樹の二重奏）」より

ウダヤン・タッカー

僕を浄化させてくれ。ある朝、眠たげに歯ブラシをもぐもぐしてたっていたんだ、すると突然に向日葵が咲きはじめた。しばらく物思わしげに座った。すると太陽が驚かせたのだ。そして魅了されている。向日葵は顔をほんのりと赤らめて、やがて控え目なまなざしを太陽におくった。その時私は間にいたんだ。

「クレタ島のボルヘス（銀の二重奏）」より

ヨリゴス・チョリアラス

蝉が騒がしく鳴くあいだ
雄牛の角笛は尖らされ
彼は出口を探して迷ったにちがいない
彼の手は堅くボールをつかんでいた
飛んでいく先は見えなかった
非存在世界の偶像を
神秘の鏡から現実へ
太陽が飛翔させたことにより
一瞬目くらましにあい
僕らは視線から彼を失ったので

「梅雨（鳥の二重奏）」より
近藤八重子

窓際で向日葵の花が
花瓶の中で明るく微笑み
夏の季節を先取りしている

蝉の抜け殻が
桜の葉の上で濡れている

「カレンダー（点の二重奏）」より
ナーラン・マトス

三月を忘れよう
なぜって、四月がやってくるから
一月の木陰で寝そべっていると
六月に木々の深みが消えていく
ツタの後ろに見える顔は誰なのか？
美しい月光が 優しく明るく
アブサンとキメラのユリを包んでいる

「朝顔（夏の二重奏）」より
よしのみえこ

夏の朝

大輪の紫
ひらりと揺れ
妖艶に誘う

溺れゆく蜂
豊満な紫へ一直線

奥に妖女が・・・

「蟬時雨（鍵の二重奏）」より
上村多恵子

夏は命の宝庫
太陽の熱射に
息も体も熱を帯びる

風鈴がゆれ
木の葉がささやき始めたとき
蟬が告げる
命の終わりの
ざわめきを

「忍者 夏 18」より
武西良和

秋が来る前に夏が
物音をたてずに走り去る
緑を横取りし
しなやかさを巻き上げ

その日のうちに手に入れたものを
小脇に抱え夕陽が
西の空へ赤く沈んで行く

「てるてる坊主」より
小湖舎

坊や 見ておくれ
あれは生まれたての太陽だよ

僕は乱反射する光の隙間をかいくぐり
粒子の海を泳いで渡り
今、新しい太陽にアクセスする



秋の沈思

「自然の優しさ（花の二重奏）」より
アナン・アード

ある時がすぎれば
わたしたちは去らねばならない
木が見ている
どちらも仕方なく進もうとする
髪は露に濡れて
葉っぱが泣いている
さよならと言いながら

「美しい風景を憎む（時の二重奏）」より
有馬 敲

いつか 稲の葉が揺れる平野のなかで
泥臭い熱風に吹かれて
つるはしを振りかぶった時代を忘れるな

「活動力（滝の二重奏）」より
村田辰夫

生命は外の力に依存している
繋がっている
この一体感こそが「自然」の状態

「晩秋の川辺（川の二重奏）」より
秋月夕香

再び見れないだろう今夜の月
秋と冬の挟間
木の葉も風に舞い やがて川に
すこまれるようにおちてゆく
「俳句（点の二重奏）」より

俳句

マキ・スターフィールド

鈴虫よ泣きたきことはまだあるか

「忘却のセレナーデ（炎の二重奏）」より
浜田千秋

今夜の月が綺麗だから
扉の前で奏でよう

漏れ出す嗚咽を
彩る星の罪深さよ

「落ち葉（線の二重奏）」より

マキ・スターフィールド

雨がふるとき
優しくふりながら
大地へと
浸透する
それは僕だろう

きれいな空に
恋してるみたいに
新しい
命がくる
それは僕だろう



冬の静清

「毎日がバラード（風の二重奏）より」

マリウス・チェラル

街角は雪だった
花ならぬ—金色の目の花がなみだに潤み
時まで失われた春のように囁いている
図書館はふくらんだ過去のように呻いている
僕の魂の二階で
きみは僕を待っている

「いま冬が始まる（星の二重奏）より」

ラウラ・ガラヴァリア

いま冬が始まる
時の泡は粘着質の跡を
蒸発させ、その輪郭をぼやかせる
秩序だった放射線は傾き、
完全な平衡のうちの泡沫を
宇宙の泡に戻す
思念はわたしたちの宇宙の冬に
もどりくる

「冬に向かう日（星の二重奏）より」

下田喜久美

キラリと光る つららの剣が
みんなの奥深く 望んでいる
正しいものへの 使者であるなら
冬よ お前は何と気高いのだ！

「生命（時の二重奏）」より
ジャーメイン・ドルーゲンブロート

果敢ない命の花のように

束の間かがやき
陽光に融ける
手に受けた雪のように

ゆるやかに漏出し

ふたたび一緒になる

「オフリドにて（青の二重奏）」より
ブハール・プロシュターニ

北の静かなみづうみに
戻り来し我々のうえに
脆くも、妙なる声を
吹き渡らせ給へ。

さざ波が
冷たい壁、渚にぶつかる。

「俳句（滝の二重奏）」より
ガブリエル・ローゼンストック

湿地荒れ
篝火いずこ
凍り月

「冬ざれ（光の二重奏）」より

ベン・ベール

空には高く
星が散りばめられている
宇宙のなかに小さく煌くランプのように。

ミトンはカチカチになり
赤くなった指先—
見えない場所を
照らしている

「貧しい誓約（夢の二重奏）」より

クレリア・イフリム

貧しい誓約とは
罨をかけないこと
村人みなが空腹で死んだ
黒い冬
彼らは見つけた
家から連れてきた鳩を
彼らと一緒にいて胸で眠っている

「冬の寒さ（夏の二重奏）」より

アドルフ・シュヴェチコフ

冬の寒さががひっそりと忍び寄る
膝でわかるのだ
男はじっと座っている
血のめぐりはゆっくりになる
指は無感覚になる
東方が緋色になる
厳しい風がだんだんと強くなる

「ほかに誰がきみを愛せるか（虹の二重奏）」より
ユーリ・タルヴェット

ストックホルム 今日 重い雪が降る
もちろん通りの上 彼らが通りに一步踏み出す前に
地元の人々は厚手のウールのコートに清潔で柔らかな
綿の保温肌着を衣類掛けから引っぱってきて重ね着する

「俳句（鳥の二重奏）」より
イスクラ・ドネヴァ

暖かな
スカーフの愛
冬のどか

「雪（炎の二重奏）」より
ムセル・エニアイ

ありもしない山を
半歩ずつ歩いている
礫（つぶて）嵐みたい わたしのからだは雨
わたしのからだ わたしの内の最も硬いもの

水は 敗れて倦んでいる
海の底が
岩から鏡をつくり
縁に添うよう曲げるように

風が樹をゆするように
その揺り籠に我を忘れたい

雪は全てを覆うという
誓願を破ったかにみえるの・・・

「雪あかり（雪の二重奏）」より

下田喜久美

花びらのようにわたしをつつむ
目を閉じると唇に小鳥のついでみ

愛よあなたの翼のもとにたどり着き
まりとなって雪明りの中に浮かぶ

「きみが忘れた場所にいる（彩の二重奏）」より

マーマド・イスマイル

—春よ、きみはどこからやって来た？
僕が神を見つけ出した場所から
—夏よ、きみはどこからやって来た？
僕が年を重ねた場所から
—秋よ、きみはどこからやって来た？
僕が足腰を弱くした場所から
—冬よ、きみはどこからやって来た？
僕が忘れた場所から

「修道院（絹の二重奏）」より

ミハイル・シネルコフ

A. P. マジロフに

モルドヴァの北の修道院…
虚無の心に新しい
陽気な新春
ちょうど空の青さが—疲弊したフレスコ壁画のそこに

熱射と霜をまともにうけて
大吹雪と雨にもみな耐えた
装飾が外から輝いてみえる
消滅したものを静かに思え

「魔術師（鍵の二重奏）」より

ヘレン・カルドナ

雪を戴いた山々が雲にまじわり
インドの景色によくでる
白砂のように風のひと刷毛
催眠の、占いの、すべての
顔がそこに埋まっていた、シャープな
生、キレのよさが、わたしを急かせる
時の外側へ踏み出すひとを
忘れないで
餌をやる白い狼を選んでね

「掬う（水の二重奏）」より

北原千代

さやかに透きとおる音を立て
水を張った洗面器の縁から
たちまち薄氷が攻めてくる
こういう冬の朝を
わたしは待っていた

「わたしの母国は（桜の二重奏）」より

アフアク・シヘリ

わたしの母国は雪に覆われました
すべての道が凍りついています！
わたしだけが冬から春へと変われたら
わたしのあたたかい息といっしょに！
わたしに春を授けた人たち
言わせないで
わたしが” 忘れた ” なんて
太陽はここに昇っています
わたしの友人へ！

「石のように（泉の二重奏）」より

アルメヌイ・シスヤン

石のように凍った
根雪があります
そこかしこに
み空から贈られた
至純の愛だったけれど
あなたの温かさに
触れることがなかったの